



モブなのに
巻き込まれています
～王子の胃袋を掴んだらしい～2

ミズメ
Mizume



レジーナ文庫

アルデバラン

レオの兄である
第一王子。学園では
生徒会長を務める。

シャウラ

貧乏な
男爵令嬢で父想い。
畑仕事が好き。

イザル

元ミラの実家の
宿屋の従業員だが、
実は公爵家や王家の
任務で影の護衛や
間諜を務めていた。
いつもミラを
支えるお兄さん。

スピカ

乙女ゲームの
ヒロインであり、
ミラの親友で、転生者。
胃袋がブラックホールに
思えるほど、よく食べる
伯爵令嬢。



カストル

レオの護衛を務める
騎士であり、伯爵令息。
寡黙で常に
男らしくあろうとしている。

ベラトリクス

アルデバランの婚約者の
侯爵令嬢で、ゲームでは
悪役令嬢のポジション。
病を経て人柄が
変わったという噂が——？

ミラ

乙女ゲームのモブキャラで、
前世は日本人。王都の食堂と
『パティスリー・一番星』で
美味しいご飯やお菓子を開発中。
自分の作ったものを食べる、
みんなの笑顔を見ることが大好き。

レオ

ミラの実家の
宿屋の客だったが、実は
ゲームの攻略対象である
第二王子だった。
ミラの作るご飯を
こよなく愛す。

Main Character

登場人物紹介

目次

モブなのに巻き込まれています
～王子の胃袋を掴んだらしい～ 2

書き下ろし番外編

義兄の大切なもの

モブなのに巻き込まれています
♪王子の胃袋を掴んだらしじ♪
2

プロローグ

「ねえ、レグルス様。今度わたくしの領地にいらっしゃいませんか？ とても景色が綺麗なところなのです」

華美な装飾品と豪奢なドレスに身を包んだ令嬢が、この国の中王子であるレグルスの腕にその身をすり寄せた。

今日は王家の庭園にて、茶会が催されている。第一王子のアルデバルンのみならず、レグルスも当然の如く参加させられていた。

レグルスは輝く銀の髪を後ろに流すように撫でつけ、不機嫌そうにしている。

だが、こうした催しに珍しく参加する第二王子を令嬢たちが放つておくはずがない。自分と同じ年頃の少女のくせに、大人のような仕草をする令嬢に、レグルスはぶるりと鳥肌を立て、首を振った。

「いや、結構だ。行きたい場所は自分で決める」

「まあ、そうですの……」

「うふふ、レグルス様は強引な方はお好きじゃないみたいよ。ねえ、殿下。うちにいたら、目新しいお菓子を披露いたしますわ。うちの料理人が、ついにパイを会得しましたのよ！」 それはもう、最上のお菓子ですの」

レグルスが最初の令嬢の手をさりげなく払うと、今度は反対側から声がかかる。

その令嬢もしなだれかかるようにレグルスにくつづいてきた。やけに強い香水の香りに目眩が起きそうになる。

（最上の菓子、ね）

憂鬱な気持ちになりながら、令嬢の発言を心の中で繰り返す。

レグルスにとって、パイの菓子はあの日公爵邸で食べた爽やかな甘さのレモンパイが最上だ。それ以上に美味しいと思える菓子をあれから口にしたことはない。

——彼女が作るもの以外では。

「……珍しい菓子なら間に合っている」

レグルスが淡々とそう答えると、また最初の令嬢が水を得た魚のように活き活きと話しだした。

「ですわよねえ、王宮にはそもそも特別な料理人がいるのに、差し出がましい」とで

「なんですか！」

「だって、あなたがおっしゃることがとても的外れなのだもの」

「それはあなただって同じでしちゃうつ」

ご令嬢同士がけんけんと揉め始め、いよいよレグルスがげんなりとしてきたとき。

「レグルス殿下！……少しよろしいでしちゃうか」

天啓のよう、ひとりの騎士がレグルスのもとへと駆け寄ってきた。

青い髪の端整な顔立ちの騎士は、名をカストル・クリューツという。見習い期間を経て、先日正式に騎士になつた。

「まあ、クリューツ様だわ……！」

その初々しくも凛々しい騎士の登場に、レグルスを取り巻いていたご令嬢たちは黄色い声をあげる。

「カストル、どうかしたのか？」

現在の状況に辟易としていたレグルスは、助かつたとその騎士に近寄つた。

ようやくご令嬢たちから距離をとることができる。

「……実は、食堂で新メニューが登場しそうだと伝令があつた」

「カストル、どうかしたのか？」

神妙な顔つきでカストルがレグルスに告げたのは、例の食堂の最新情報だつた。

「本當か」

「ああ。イザルさんが新商品を卸したらしく、あとで食べに来てと言われたそつだ。どうする？」

声量を抑えてこそそと話すカストルの言葉に、レグルスはぐるりと会場を見廻る。同世代の貴族子女たちが集められた茶会の会場。

色とりどりのドレスに身を包んだご令嬢たちに、菓子が並べられたテーブル。

全てが煌びやかなはずなのに、不思議なことにレグルスの目には色褪せて映る。

食堂で出されるメニューは時折茶色一色だつたりするのだが、これらの品々の何倍も輝いて見えるのは不思議なものだ。

(それに……食堂には彼女もいる)

いつも笑顔であたたかく迎えてくれる彼女——ミラは、貴族とのやりとりで疲弊したレグルスを癒やしてくれる大切な存在だ。

ミラのご飯は美味しい。そして、流れる月日の中で、自分の中にそれ以上の感情が生まれていることに、流石のレグルスも気付いていた。

「レオ、どうした？俺はもうすぐこの茶会を抜けて食堂に向かう予定だ」

物思いに耽つていたレグルスを、カストルの言葉が現実に引き戻す。

「お前が行くなら俺も行く」

「……でもなあ、これって半分はレオのために集められたようなもんだろう」

三年前、レグルスの護衛騎士であるセイのもとに騎士見習いとして連れてこられたカストルは、最初こそ緊張している様子だったが、すぐにレグルスと打ち解けて気の置けない友人となつた。

みんなの前ではきちんと敬語になるが、こうしてふたりで話すときはすぐに碎けた口調になる。

カストルが『これ』というのは、先ほどのようなご令嬢たちのことを指していた。

同世代の貴族子女が集められている茶会——その目的は、単なる交流だけに留まらない。先ほどの令嬢たちが最たる例だ。

王族であり、婚約者のいないレグルスに娘をあてがおうとする貴族は年々数を増やしている。

それをなんとか躱してはいるが他の茶会は断ることができても、母である王妃の主催となれば参加せざるを得ないのが辛いところだ。

「それはそうだが、彼女たちは俺だけが目的じゃないだろう。それに……なんでお前だ

けで食堂に行くんだ」

レグルスは、この茶会への不満も上乗せしながらそう言つて口を尖らせた。

そもそもカストルが食堂の新メニューについて先に知つてることが少し悔しい。勿論レグルスだって、ミラとは手紙のやりとりをしていて、彼女が最近とても楽しみにしている食材があることは知つていた。

だがそれを、こうして人づてに伝えられると面白くない。

レグルスの非難めいた言い方も歯牙にかけず、カストルは当然だと言わんばかりに口を開いた。

「え？ だってあそこのご飯がこの辺じゃ一番美味しいだろう。騎士団の先輩たちとも非番の日にちよくちよく行つている。今日も騎士団の誰かがいるんじやないか？」

「！ そう、だったのか……」

どうやらレグルスの知らないところで、カストル以下騎士団の面々は、あの食堂の常連になつてゐるらしい。その事実をこれまで知らなかつたレグルスは、大いに狼狽える。確かに初めて共に食堂を訪れた折、カストルもミラの料理にいたく感動していたことは覚えているが、そこまで行きつけにしているとは知らなかつた。

（そういうえば、あのときはミラに会えなかつたんだつたな。セイとイザルと四人でテー

ブルを閉んだんだつ)

レグルスはそんな些細なことまで思い出してしまった。

「……おふたりは何を話していらっしゃるのかしら……？」

「わかりませんけど、美麗なレグルス様と寡黙なカストル様が並んでお話しされていると、絵になりますわね」

側にいる令嬢たちはふたりに話しかけたいが、真剣な話を邪魔することは得策ではないと、その場に待機する。

その目にはギラギラとした炎が宿っていた。彼らに話しかける機会を窺っているのだ。

「俺もなんとかこの場を離れないが……」

レグルスはそんな令嬢たちを一瞥したあと、カストルに向けていた視線をゆっくりと少し離れた場所に向けた。ことは別に、子息たちが塊になっている場所がある。

その集団の中心には、レグルスにどこか似ている容貌を持つ煌びやかな金髪の少年がいた。

第一王子のアルデバラン。レグルスのひとつ年上の兄だ。

この場を離れても問題ないか確認するつもりで兄の様子を窺うと、いつもどおり貼りつけたような完璧な笑顔で対応する彼の周りは、令嬢たちで溢れかえっている。

(やはり……今回も来ていない、か)

その令嬢たちの中に、誰よりもひときわ目立つはずの赤髪の少女の姿はなかつた。アルデバランの婚約者であるベラトリクス・ロットナー侯爵令嬢は今回も欠席のようだ。

近年、彼女と兄のアルデバランが並び立つところを見かけた覚えがない。

レグルスの記憶では、そのベラトリクスという令嬢はなかなか苛烈な女性で、こうした場で兄の側に他の令嬢が近づくことを絶対に許しはしなかつた。令嬢たちもそれがわかつているのか、絶対にあのようにアルデバランに話しかけることはなかつたように思う。

さらに、これまでアルデバランの側には、従妹である公爵令嬢のアナベルがいることが多かつた。だが、アナベルはかねての希望であつた隣国への留学を果たしたため、現在はこの国にはいない。

苛烈な婚約者と仲の良い従妹。両者が不在の今、だからああして他の令嬢たちが兄にくつついて回っているのだろう。令嬢たちの野心は加速するばかりだ。

「兄上とベラトリクス嬢は、今後どうするおつもりなんだろうな」

レグルスが声を潜めると、カストルも怪訝そうな顔で相槌を打つ。

「わからん。俺も暫くかの令嬢を見ていない。聞いた話では、以前病で倒れられてか

らは、人が変わったようだとのことだが……眞偽は不明だ」

「学園でも大人しく過ごしているとのことだが……兄上との関係性が全く読めん。おふたりのことを俺が気にしたつて仕方のないことなのだが」

レグルスは再度、集団を見遣る。

彼の兄である第一王子は、心配そうに眺めるふたりをよそに、婚約者のいない集団の中心で、やはり完璧な笑みを浮かべていた。

一 乙女ゲームの世界

「これでよし、と」

王都の一角にある洋菓子店『パーティスリー・一番星』エースタルの厨房で、新しい菓子を作つていった私——ミラ・ヴェスターは、その出来栄えに満足して手をはたいた。

この店は紅白の縞々模様のオーニングで彩られ、可愛らしい外觀だ。

厨房は、オープンが三つ、広々とした石造りの作業台、大きな氷室……と、公爵邸さながらの設備が整つていて。

ダムマイアーホームの会長さんと公爵様が気合い十分といった面持ちで取り組んだだけあって、とても素敵な造りになつていて。

自慢の、私のお店だ。

眼前にある作業台には、この店の看板商品であるパイを用いた菓子が並んでいる。

季節の苺と、卵の風味が豊かで濃厚なカスタードクリーム、それからパイを層にして重ねたミルフィーユは、見た目にも華やかだ。

「苺はやつぱり見栄えがいいなあ。気に入ってくれるといいんだけど」

私はたくさんのミルフィーユを手際よく皿に並べながら、友人の顔を思い浮かべた。

頬が緩んで自然と笑顔になる。

私は来月で十四歳になる。十歳の秋に地方の小さな町から王都にやってきて、まる三年とひとつの冬が過ぎた。

故郷では、両親が営む宿屋の手伝いをしながら暮らしていた。

あの頃の私はいずれその町の誰かと結婚して、そこで一生を終えるのだと思っていた。こうして王都で過ごす日々が来るなんて、想像もしていなかつた。

「スピカはきっとたくさん食べるだろうから、多めに持つていこうっと」

持ち帰り用の箱に完成したミルフィーユを詰めながら、友人のスピカのことを考える。物心がついた頃からずっと一緒にいた、天真爛漫で食いしん坊な大切な友人のスピカ。私がこうして王都に来ることになったのも、今の私があるのも、全てはあの日の彼女のひと言がきっかけだつた。

『ねえ、ミラ、聞いてよ。実はわたし、この乙女ゲームの世界のヒロインなの！』

——五年前のある日のこと。

月明かりに照らされた宿屋の屋根裏部屋で、スピカはくるくると舞いながら、私に唐

突にそう告げた。

お人形のように可愛らしい彼女には、前世の記憶があるという。

そしてこの世界は、乙女ゲームの世界であり、他でもない彼女自身がヒロインなのだと言つた。

彼女は孤児院で暮らしているけれど本当は伯爵令嬢で、ゆくゆくは攻略対象者と呼ばれる人たちと出会い、王妃になつた上で逆ハーレムと呼ばれるエンディングを目指すのだと息巻いていた。

小さな町で暮らす田舎の八歳の少女が語つた、とんでもない夢物語。

本来ならば荒唐無稽で意味がわからないと思つただろう。

だが、なぜだかその内容は私にも理解できた。

彼女の話を聞いた瞬間に私も日本人だつた前世の記憶が蘇つたのだ。

スピカが生前やっていたのは、『星の指輪～煌めきウエディング2～』という、いかにもな名の乙女ゲームだつたらしい。

前世の私は乙女ゲームをやつたことはなかつたけれど、そういったものを題材にした小説をよく読んでいた。

だから、乙女ゲームの世界に転生したヒロインが、強引にイベントを進めたり、常識

外れの行動をとつたりすることで起きる『ざまあ』な展開についてよく知っていた。

王妃になる、逆ハースト……そういうキャラクターほど小説の中では悪者になり、最後は追放されたり断罪されたりして、悲惨な結末を迎えると決まっているのだ。頭の中がお花畠なスピカに、私は冷静に指摘をした。

『このままだとざまあされるよ』と――

それに怯えたスピカは今では逆ハールートを諦めたようだ。私はそんな彼女が今後『ざまあ』されないか少し心配で、見守ることにしている。

ちなみにスピカによると、私のゲーム内での立ち位置はヒロインの幼なじみの少女。ヒロインであるスピカが町を出てからのストーリーには全く関与しない、見た目も平凡なモブ中のモブ。

それなら私には乙女ゲームのことはほとんど関係ないだろうと、前世が家庭持ちのパティシエだった私はご飯やお菓子作りに熱中した。

そしてスピカや周囲の人々に家庭料理やお菓子を振る舞うようになり――

もつとこの世界の人々に喜んでもらえるようなご飯を作りたくなった。日本にはあったのにこの世界にはない美味しいものが、たくさんあつたから。

やがて、私は料理の修業をするために、宿屋の主人である父の古くからの知り合いだつ

たバートリッジ公爵に後見人になつてもらい、伯爵家に引き取られたスピカと同じタイミングで王都へとやつてきたのだった。

「おお、ミラ。これが春の新メニューなんだね」

これまでのことに思いを馳せていた私は、話しかけられて顔を上げた。

私がお菓子を作る様子を眺めていた男性――ドミニクさんの声に、笑顔で答える。

「はい。やっぱり春は苺のお菓子かなと思いまして」

「素晴らしいな。早速、作り方を教えてくれるかな」

「はい、勿論です。これまでの応用なので、ドミニクさんならすぐにできると思います！」

「ははは、そうだといいんだけどねえ」

苦笑いしているドミニクさんは、元はバートリッジ公爵家の厨房でデザート作りを担当していた、謙虚で腕のいい菓子職人だ。

バートリッジ公爵家では、夫人の方針で菓子を作る職人には厳しい修業が課されており、ドミニクさんもそれをやり遂げた素晴らしい人なのだ。

現在、ドミニクさんは『パティスリー・一番星^{エスティル}』の店長代理として店を切り盛りしてくれている。この『一番星』は、私が日本で覚えたお菓子を作り、それらを広めるためにできたお店だけど、表向きはドミニクさんにお任せしている。

私がミルフィーユの作業手順をさつと説明すると、ドミニクさんはあつという間に理解し、すぐに再現してくれた。

「ミラ、そろそろ時間じゃないのか。今日は食堂にも行くんだろう。あまり無理しないようこな

「あ……！ 本当に、急がないと」

ハツとした私は、慌ててエプロンを外し、用意していた箱を手に取った。「では、ひっべきます！」

一九三〇年五月

笑顔で扉を開けて外に出た私は、歩き慣れた王都のいつもの道を行く。目的地の食堂は、パティスリーのある王都の中心街から、少しだけ離れたところにあります。

王都にやってきてから、私は公爵様の許しを得て食堂でも働いていた。

その食堂で作つた焼きうどんやメンチカツといった日本の家庭料理は、この世界の

勿論、それらの料理も最初に私が作つたもの。

王都に来て少し経った頃から、私は店主のリタさんのもとで様々なご飯を提供した

のだ。

二年前に増築してフロアも厨房も当初の二倍の広さになり、従業員も増えたりタさん
の食堂は、今でも大繁盛となっている。

くる。

そのお忍びの人たちの中には、私の友人たちも含まれるのだけど。
最後の角を由^ゆさり^なづく、私は見^み泉^{いずみ}と上^あざる。食堂の看^{かん}反^{ぱん}見^みこ^こい^いづく、まうな、^{まうな}判^は則^そ

着だ。

「リタさん こんにちわ」

食堂の扉を開けると、快活な女主人の明るい声が飛んできた。

「例のあれ、予定どおり午前のうちに届いてるよ。ほらそこ」

「わあっ！ 嬉しいです」

午後の仕込みをしていたリタさんが指を指した先には、大きな麻袋に入つた
んとふたつ鎮座している。その袋の中を確認した私は、にんまりと微笑んだ。

荷物を整理して、素早く着替えて厨房へと入る。
今日もこれから、楽しい食堂の時間が始まる。

急速とある仕込みをしてから、数時間後。

「……ふわ……ご飯のにおい……」

深鍋の蓋を開けると、蒸氣と共に懐かしいあの香りが漂ってきて、私は思わず感嘆の声をあげてしまった。

お米を炊いたときの、甘やかでほっこりとする、特別な香り。今日はスペイスなどで味つけをしてピラフのように炊き込んでいるため、それらの香りもする。

けれどやはりなんといつてもほかほかご飯の炊きたての香りには抗えないだろう。(この世界でもお米が手に入るようになつて、本当に嬉しいなあ)

このシェテンメル王国では小麦は広く生産されていたが、稻作はあまり盛んではないようだつた。

パンやうどんの文化が根付いているこの国で私が初めてお米を見たのは、今から二年前のこと。

王都の市場で見つけたときは、震えるほど嬉しかつた。だつて、お米だ。日本人ならば大好きだもの。

そのときは食堂で提供できるほどの量はなく、値段もかなり高価だつた。

そのお米がたつた二年弱で流通するようになつたのは、王都一の伝手や販路をもつタムマイアーホームだ。金錢的な支援をしてくれた貴族の協力者がいたとも聞いているが、本当にありがたい。

「ミラちゃん、首尾はどう?」

作業を進めていると、私とお揃いのエプロンを巻きつけながら、茶色の長髪を無造作にひとつに束ねた男性——イザルさんが厨房に入つてきた。

私の付き添いで王都に来ることになつたイザルさんは、蓋を開けてみると、実は王家

に仕える凄腕の諜報員で、しかもダムマイアーホームの息子だつた。
そんな肩書きが多いイザルさんだが、今では営業時間になると食堂へとやってきて、厨房の鉄板の前で焼き物を担当している。とつても上手なのだ。

「大成功です！　お米、とても美味しいですよ」

「うわあ、ミラ。いいニオイだねえ～」

「メラクも来てたの？　おはよう」

私はイザルさんの後ろからひょっこりと顔を出した男の子に挨拶した。

イザルさんとお揃いの茶髪を揺らす、童顔で垂れ目がちな男の子。

メラクはイザルさんは全く雰囲気が違うけれど、彼の弟であり、商会の後継者として日々様々なことを勉強している。

このメラクも、例の攻略対象者のひとりである。

「おはよう。ボクもどうしても気になつたから～」

のんびり言うメラクに、イザルさんはため息をついた。

「つたく、本当は別に用事があつたのに。どうしてもついてくるつて言つて聞かなかつたんだよな、メラクは？」

「ええ～。ミラのご飯を兄さんだけでヒトリジメなんてずるいでしょ」

口を尖らせながら、メラクはイザルさんに抗議をしている。桃色の頬をぶくりと膨らませる様は、とても可愛らしい。

メラクはいわゆる『年下ワンコヅ』と呼ばれるタイプのキャラクターのようだ。

「お米、とってもいい感じです！　ダムマイアー商会のおかげで、私の夢がひとつ叶います。本当にありがとうございます」

言い合いをする兄弟を和やかな気持ちで見つめながら、私はふたりに感謝の気持ちを伝えた。

「はは、ミラちゃんは大袈裟だなあ。……うん、本当にいいにおいだね～。メラクを連れてこなかつたら、恨まれてたかも」

鍋に顔を寄せたイザルさんは、鼻をすんすんと鳴らしながら香りを満喫する。

その横で、メラクはやつぱり少し不服そうな顔をしている。

私はそんな彼を見て苦笑しつつ、眉尻を下げた。

「ご飯……みんなに美味しい食べてもらえたらしいんですけど」

私は元々ご飯が大好きだから問題ないけれど、パン文化……いや、今やうどん文化圏の人たちに、お米料理が受け入れられるか一抹の不安があった。

この国は前世でいう中世ヨーロッパのような雰囲気なのだけれど、私が記憶を取り戻す前からうどんは存在していた。同じ和食代表のうどんとお米ではあるけれど、うどんは元々この国でも馴染みのある小麦料理だ。お米とは少し立場が違う。

私が不安を吐露すると、兄弟は笑みを浮かべた。

「大丈夫大丈夫、ミラちゃんの料理に間違いはない。それに、これで米の消費が増えたら生産者も増えて、商會的にはいいことずくめだしね。そのためにも、どんどんお米料理を作つてほしいな」

「ミラ、だいじよぶ。ぜつたい美味しいよ^{おいしい}」

私の心配事をばつさり否定したふたりの表情を見ていると、自然と私も元気が出でくる。

「今日はスピカと、あとはお試しでもいいつて方に提供してみようと思います。それから徐々に、この国の人にもご飯を広めたいです」

気合いを入れ直した私は、もう一度鍋の蓋^{ふた}を開ける。

木べらで鍋底からしつかりと混ぜ合わせると、出来立てのチキンピラフからは、美味しいしそうな香りと湯気が立ちのぼった。

ふたりに味見をしてもらいつつ作業を進める。すると、食堂はあつという間に午後の開店時間を迎えた。

店を開けると同時に、たくさんのお客さんがやつてきた。

私は厨房に隠れて、注文の様子をいつもどおり覗き見する。^{のぞ}傍^{はた}から見るとかなり怪し

いとは思うけれど、お米を初めて食べるお客様の感想が気になつて仕方ないのだ。

「な、なんだこれは……！」

「流石はイザルさんですね！」

「副料理長万歳!!!」

「おーそーだろそーだろ。心して食いな。この俺、副料理長イザルさんの新作だからな！」
すると営業開始早々、屈強な男たちが集うテーブルに料理を運んだイザルさんは、その人たちから口々に賞賛の言葉を投げかけられていた。常連のお客様でもある、騎士団の面々だ。

「やつぱりイザルさんの料理に間違いはないなー！」

「うんうん。この界隈では間違いなく一番の料理人だ」
「ははっ、ありがとな〜」

褒め称える客に礼を言いつつ、イザルさんは私が隠れている厨房のほうを振り向く。
そして笑顔で頷いた。

ざと流したものだ。

パティスリーでも食堂でも、私は表に出ないことになつてゐる。

それは三年前に起きた事件が契機となつていた。公爵家で一緒に働いていた料理人が、私のレシピを盗もうとしたのだ。そこまで大仰なことではなかつたのだけど……

でも、私にとつては日本で当たり前のようにあつた菓子や料理をこの世界で作り上げることは、とても革新的で素晴らしいことである一方、非常に危険な側面もあるとバートリッジ公爵たちに聞かされた。

その料理人以外にも私の技術を手中に收めようとして、レシピを盗んだり、私に危害を加えようとしたりする輩がいるかもしれない、ということだつた。

なので、食堂で新メニューを出すときは、必ずイザルさんが料理を配膳することにしている。同じように『一番星』(エーステル)ではドミニクさんがその役割を担つてくれている。これは私の身を守るために、両親を交えて話し合われ、決定したことだつた。

そういう理由で、私はこうして壁に隠れて念を送つてゐる。

「なんだ、この卵は……ふわふわで、チーズがとろりと溶けて……そこにトマトソースの酸味がつつつ！」

「コメとやらは初めて食べたが、美味いもんだな！」

イザルさんに運んでもらつたのは、先ほどのチキンピラフの上にとろとろ卵のオムレツをのせたオムライス。日本では定番の洋食のひとつだ。

ちなみにそのオムライスは、チーズ入りのオムレツを焼いたあとにお皿に盛つたご飯の上にのせて、真ん中をナイフで切つて開くタイプのもの。

しつかり焼いた卵で巻くタイプもいいけれど、こちらのほうが卵がふわとろで、私は好きだ。中のチーズがとろけて、さらによろよろのダメ押しである。

(よかつた……ひとまず満足してもらえたみたい)

どうやら騎士団のお客さんの反応は上々だ。私はほつと胸を撫で下ろした。

お米料理がこのままこの世界でも受け入れてもらえたらしいな、と思う。

お米の販路拡大は、私にとつても非常に嬉しいことだ。広まれば、新たな料理の幅も広がるし、新しい料理が至るところで生まれるかもしれないものの。

「卵が花みたいで綺麗ですね……これは……！」

美味しい美味しいとオムライスをかき込むガタイのいい人たちに交じつて、青髪の少年が

目を丸くしているのが見えた。

私と同じくらいの年齢に見えるその人は、いつもこうして騎士団の方々とご飯を食べに来てくれている。

接客のときに関わるくらいだけれど、この集団は食堂によく来るので、もう顔馴染みだ。その青髪の少年はわいわい賑やかに食べる先輩騎士さんたちと比べると口数は少ないけれど、ご飯を食べて嬉しそうにしているのは見ていて伝わってくる。今も美味しそうにオムライスを頬張ってくれているので、ひと安心だ。

「ミラちゃん。ご予約のお客様が到着したよ。まつ、いつものあの子なんだけどね。上に通していいから、料理を届けておいで。そのまま休憩していいから」

「ありがとうございます」

後ろからリタさんの声がかかつたため、私は偵察をやめて厨房に戻ることにした。きっとスピカだ。私はささつとオムライスをもうひとつ作ると、トレイに盛りつけたそれを持つて、彼女が待っているであろう二階の個室へと急いだ。

「ミラ！」

部屋の扉を開けると、輝く金の髪に愛らしい桃色の瞳、お忍びなので控えめではあるだろうが、華やかなワンピースに身を包んだ美少女が嬉しそうに私を迎えた。

彼女こそ、この世界が舞台である乙女ゲームのヒロイン、スピカである。

「いらっしゃい、スピカ」

「それが……例の？ わあああ、早く食べたあいつ」

「今回も自信作だよ。さあ、食べよう」

私が運んできたオムライスを見てキラキラと目を輝かせるスピカを誘つて、私たちは四人掛けのテーブルに腰を下ろした。

彼女にはお米が手に入ったことを、事前に手紙で報告していた。だから今日この料理を作るタイミングに合わせて、わざわざ食堂を訪れてくれたのだ。

わかるよ、スピカ。お米があるなんて、一大事だもんね。

「ご飯……!! とろとろオムライス……!!」

早速オムライスをひと口頬張った彼女は、頬に手を当ててとろけるような表情をしている。気に入つてもらえたようで、何よりだ。

ご飯にはしっかりとトマトと食材の味が染み込んでいて風味豊かだし、そこに卵の柔らかい甘みとチーズのとろける塩味が加わって、えも言われぬ美味しさだ。そしてどこか、懐かしくもある。

「今日、アークツルさんは一緒じゃなかつたんだね」

一緒になつてオムライスを食べながら、私はスピカに尋ねた。

彼女がこうしてお忍びで外出するときは、必ずアークツルさんが送り迎えしている。彼が来ないのは珍しいので不思議に思つていると、スピカは一度スプーンを止めて答

えてくれる。

「実は今日、王城でお茶会があるらしくて、お兄様はそっちに行つてるの」「へえ、そうなんだ。スピカは行かなくてもいいの？」

「わたしはまだ参加しなくていいってお兄様が言うからまだ一度も参加したことないんだよね。まあ正直お茶会なんかよりも、ミラのご飯のほうが優先だし！」

力強く握りこぶしを作るスピカに「ありがとう」とお礼を言いながら、私は少し過保護な彼女の義兄の姿を頭に浮かべた。

スピカよりも淡い色味のさらさらの金髪に、どこまでも見透かすような青い瞳。中性的な美貌を持つその人——アーチツルス・クルトも、乙女ゲームの攻略対象者のひとり。彼はクルト伯爵の縁戚の子供で、幼少の頃に跡取りのいなかつた伯爵夫妻のもとに養子として引き取られたそうだ。

だから、スピカとは血の繋がりはない。

あとから伯爵家に引き取られたスピカとの関係が悪くならないのか老婆心ながら心配していたのだけれど、幸いなことにスピカは伯爵家で父と義兄から大変可愛がられているらしい。それにて安心したことを覚えている。

(それでも、お茶会かあ。なんだかすごいな、やっぱり)

貴族社会において、成人ではない子女たちは夜会ではなくお茶会で社交をする。それは前世で読んだ小説から得た知識だ。そうしてそれは、この世界にも当てはまるようだつた。

前世の感覚だと、まだ子供なのに社交だなんて大変だなあ、と思う。

でもこの世界での成人は十五歳なのだ。つまり、来年の春に誕生日を迎えた私とスピカも成人ということ。あまりに早すぎて、なんだか不思議な感じがする。

「そういうばさ、ミラはレオ様とは最近会つての？」

この国の特産品である緑茶をすりながらスピカが聞いてきたので、私は最近のことを思い返してみた。

……そういえば、ここにころレオとは会っていない、かもしれない。

「手紙のやりとりはしてるけど、よく考えたらこの頃はこの店にもあんまり来てないかも。忙しいんだろうね」

私は少し考えたあと、思ったままにそう答えた。

「ふうん、そつかあ。……手紙のやりとりしてるとかレオ様可愛い……」「え？」

た。なんだろう。気になる。

「えーっとまあ、今日はお兄様と一緒にお茶会に出席してるんだと思うわ。王城で開催つてことは、当然王子様であるレオ様たちもいるんだろうし」

こほん、とわざとらしく咳払いをしたあと、スピカはそう言つて残りのオムライスを食べ進める。

そう。私の友人であるレオは、この国の中二王子だ。

出会ったときはその事実を知らなかつた。初めて聞かされたときは流石さすがの私も思考が停止してしまつたことを思い出す。

王子が友人だなんて畏れ多いけれど、いろいろとあって、今はその関係に落ち着いている。

高貴な立場である彼だけれど、時々この店には訪れていた。でも、最近は忙しいらしくて、全然顔を見ていない。

ふたりで他愛なきわいもない会話をしながらオムライスを食べ進めていると、コンコンというノックの音がした。

そのあとに聞こえたのは、緩く間延びした声。

「スピカちゃんにミラちゃん、イザルだけど、少しお邪魔してもいいかな？」

私とスピカは顔を見合させたあと、「どうぞ」と返事をする。

部屋に入ってきたのは、イザルさんだけではなかつた。

「……食事中に申し訳ありません。失礼します」

イザルさんの後ろに見えたのは、青髪の若い騎士様。先ほどまで階下で食事をしていたはずの少年だった。

入室してきた彼の射るような鋭い眼差しは、なぜか私に向けられている。普通に怖い。「こんにちは。いつもご来店ありがとうございます」

戸惑いながらペコリとお辞儀をすると、騎士様も会釈を返してくれる。

(なんだろう……私に用事……？ もしかして、オムライスの苦情……？)

不安に思いながらイザルさんに視線を移すけれど、彼はいつもどおりの柔軟な笑みを浮かべるばかりだ。

すると突然、隣にいたスピカが大きく目を見開いて、私に詰め寄ってくる。

「……ちょっと、ミラ！ いつの間にカストルとも知り合つてたの!?」

「えっ？」

「カストル？　あの青髪の人のこと？」

「そうよ！　前に言つたじやない。『寡黙で真面目な女嫌いの騎士キヤラ』！　……攻略対象者だよ、あの人もっ」

スピカと同じよう声を潜ひそめて尋ねると、彼女からは興奮気味にそんな言葉が返ってきた。

寡黙かまくで真面目で女嫌いの騎士。それは以前スピカがつらつらと教えてくれた、とある攻略対象者の特徴だ。

以前スピカにこの乙女ゲーム世界について教えたもつてメモしたのだけれど、残念ながらその紙はなくしてしまった。けれどそれを正直に話すと、スピカは再度それを手紙にしたためてくれたので、その情報はよく確認している。

私は思わず騎士様を一瞥いちべつして、それからまたスピカに視線を戻した。

騎士様は居心地が悪そうなむつり顔のままだ。

（まさか、また自然に攻略対象者に出会っているパターンがあつたなんて……）

先ほどまで、彼に対する認識は食堂の常連さんだったはずなのに。

私はモブなのに、なぜか攻略者たちと自然に出会ってしまっている。

「……なんかタイミング悪かったかな？」

こそこそ話している私たちを見て、イザルさんは困つたように頭を搔かいている。

何やらぶつぶつと呟いているスピカをそのままに、私は慌あわてて入り口にいるふたりに近づいた。

「あっ、いえ、大丈夫です。どうかしましたか？」

「こいつがちょっとミラちゃんに話があるらしくて」

イザルさんは、隣の騎士様の肩に手を置く。

「話ですか？」

「そう。ほら、カストル」

イザルさんに促うながされ、青髪の彼は私に再度軽く会釈をしてから口を開いた。

「食事をしているところに割り入つてしまい、恐縮です。俺の名はカストル・クリューツ。王国の騎士団に所属しています」

どこか怒つているように見える顔のまま、彼ははきはきとした口調で私に告げる。表情の変化がない分、少しだけ怖く感じてしまう。

本当に、スピカが言つたとおり、カストルという人物だつたようだ。

これまで知らずに客として接してはいたが、こうして自己紹介をされたのは初めてのことなので、私は思わず氣を引き締める。

「ミラ・ヴェスターです。クリューツ様……お話とはなんでしょう」

「俺に対して、敬称は不要です。あなたはレグルス殿下をレオと呼んでいると聞き及んでいます。シリウスさんとも親しいのでしょう。そうであれば俺にもそろしてください。年齢も同じなので、敬語もいりません」

「えつ、で、でも……」

スピカに以前聞いた話では、攻略対象の男性キャラクターたちはほとんどが貴族や王族ではなかっただろうか。

確かにレオとは友人だし、セイさん……もといシリウスさんとも気軽に話している。だからといって平民の私が貴族のご子息である騎士様と気安く話すわけにはいかない、と思う。

どう対応すべきかたじろいでいると、上から「ミラちゃん」と優しい声が降ってきた。イザルさんだ。

「大丈夫だよ。このカストル、実はレグルス殿下の護衛騎士なんだ」

「そうなんですか？」ということは、セイさんと同じ……？」

「そうそう。最近正式に任命されたんだけどね。だからまあ、主である殿^{ある}下や先輩騎士であるセイよりも敬つているような話し方はやめてほしいってことだと思つよ。またた

く、カストルは相変わらずだなあ。そんな怖い顔してたらミラちゃんたちが怯えちゃうだろ」

「……それは、申し訳ありません」

イザルさんにばしりと背中を叩かれて、騎士様はバツの悪そうな顔をする。

その様子を見て、ふたりも氣の置けない間柄あいだがわいなのだと理解した。

なるほど。ではこの騎士様もセイさんのように、これからレオと共にいることが増えるのだろう。

「それでは、カストルさんと呼ばせてもらいますね」

「……」

少しだけ彼の片眉がぴくりと吊り上がった。

いろいろと考えた結果、思い切つて言つてはみたものの、これは正解ではないらしい。さんづけも、敬語もダメつてことなのだろう。

「じゃあ、カストルと呼んでもいい？」

再度敬語をなくしてカストルに話しかけてみる。

すると、見た目の変化は乏しいけれど、騎士様——改めカストルの表情が満足そうなものになつた気がする。

「はい。問題ありません」

本当は、問題大アリだと思う。レオと友人であるせいで、いろいろ^{ゆが}でしまつていい。とりあえず、人目につくところではふたりを呼び捨てにしないよう心がけよう。「よっし。じゃあお互い自己紹介も終わつたところで、俺は下に戻るね。オムライスの注文がすごくてさ。んじゃカストル、用事が終わつたらお前もさつさと戻つてこいよ」私たちの様子を見守っていたイザルさんは、颯爽^{さっそう}とその場を離れた。

私とカストルと、離れたところにいるスピカだけが部屋に取り残される。「ミラ嬢。少しこちらに来てもらつてもいいでしようか」

一瞬の静寂があつたあと、カストルは私にそう言つた。例の私への話とやらなのだろう。全く内容に見当がつかないけれど彼がちら、とスピカを一瞥^{いちべつ}したのを見て、ここではできない話なのだろうと察した。

「大丈夫です」と答えると、スピカを部屋に残してふたりで廊下に出ることになった。スピカは未だに思案顔をしていた。

「これをお渡しします」

人気^{ひとけ}のない廊下でカストルから手渡されたのは、二つ折りにした小さな紙だった。封もされていないし、メモのように見える。

「ええと……読んでもいいんだよね？」

そう問い合わせると、青色の頭がこくりと動いた。どうやらそれでいいらしい。不思議に思いながら、その紙を開く。

(……わあ！ レオからだ)

走り書きのようになに文字が並んだ紙には、『あとで必ず行く』という内容が書かれていた。最後には差出人の名もあり、そこには確かに、『レグルス』という彼の名が刻まれている。「今日は王城で茶会が開かれています。俺が騎士団の先輩たちとここに来ると言つたら、レオも来たがつっていました。ですが、第一王子につかまつて抜けられなかつたので、君に言付けを頼まれました。直接これを渡してほしいと」

私がその手紙に目を通していると、カストルが朗々と状況を説明してくれる。なるほど、これはレオが時間がない中で慌^{あわ}てて書いたものらしい。いつもはきちつとして美しいレオの筆致^{ひづち}が、少し乱れている。

(わざわざそんな言付けをしてくるなんて、レオも随分律儀だなあ)

彼が来たときのために、もう一度オムライスを作る準備をしておかなくては。やっぱり出来立^{おき}てが美味しいもんね。思わず笑顔になりながら段取りを考えていたとき、私ははたと気がついてしまつた。

「あれ？ お茶会がまだ終わっていないなら、カストルも……」

「……俺は、抜けてきました。今日は護衛としてではなく参加者のひとりだったので。あんな場所にずっといるなんて無理です」

何か思い出したのか、髪色のように青ざめたカストルは、ぶるりとその体を震わせた。

カストルのことを女嫌いだと、スピカは言っていた。

凛として整った顔立ちに、鍛えられているであろう体躯^{たいく}。貴族子息であり、将来有望な騎士ともなれば、世の肉食女子が放ってはおかないと。勝手な推察だけれど。カストルがここに来るときはいつも騎士団の先輩たちと一緒にいたし、リタさんや私は必要最低限ではあるが言葉を交わしていたから、これまで女嫌いとは思わなかつた。だけど本人にとっては、深刻なことなのかもしれない。

「……君と殿下は」

「はい？」

カストルを観察していると、彼の空色の瞳とぱつちり視線が合つてしまつた。てっきり逸らされるかと思ったが、そのままだ。

途中で言葉を遮^{さえ}つてしまつたので首を傾げて続きを待つたが、「いや、なんでもない」と言葉を濁^{にご}されてしまった。

どうしたのだろう。

「それでは、用件が済んだので、俺はこれで――」

「あ！ ちょっと待つて」

立ち去ろうとしたカストルを、私は呼び止めた。この機会に是非とも聞きたいことがある。

「カストルはさつき、オムライスを食べてたよね。どうだった？ これまでにお米を食べたことはあつた？ 初めて？ 食感が気持ち悪いとかはなかつたかなあ？ 食べてみて、芯が残つていたりしなかつた？」

「――つ、近い、ので！」

オムライス、特にお米の感想が聞きたくて、身を乗り出すようにしてぐいぐい質問攻めにすると、カストルは慌^{あわ}て私から距離をとつた。

「あ、ごめんねカストル。つい」

女人人が苦手だというのに配慮が足りなかつた。でもここで引き下がるわけにはいかない。

私が気合いの入った目でじいっと見つめていると、カストルは観念したように感想を教えてくれた。

「…………美味しいしかった、と、思います。初めての食感で、つぶつぶとしていましたが、悪くなかったです。上のついていた卵ともよく合っていたし、あとを引く美味さがあつた……と。まだ全部は食べていませんが」

その回答で、私は大切なことに気がついてしまう。

全部食べてない、って言つたよね？

「まだ食事中だったの!! ほら、早く戻らないと。ご飯は冷めたら美味しいよ！」

「待て、引っ張るのは…………！」

「あっ、ごめん…………！ でも、美味しいしかったならよかったです」

急いで戻つてもらおうと咄嗟に彼の袖を引っ張つてしまつた。慌てて手を離して謝る。そうだった。こういうのはきっと苦手なはず。

ちらりとカストルの表情を窺うと、先ほどのような青ざめた顔をしていなくて安堵する。

前のめりになつてしまつたことを反省しつつ、カストルからいい感想をもらえたことについて笑顔になつてしまふ。嬉しい。



「ふふ、レオも気に入ってくれるといいなあ」

「そここぼしてしまったのは、ほとんど無意識だつたと思う。
「……そう、ですね。では、俺はこれで」

「あ、そうだ、カストル。最後にもうひとつお願ひがあるんだけど」

立ち去ろうとしたカストルを、私は再び引き止めた。不思議そうな彼に、私ははつきり伝える。

「カストルも、私に対して敬語を使うのはやめてほしい。勿論敬称もなしだよ？」同じ

年なんですよ、私たち。それに私は、いち平民に過ぎないんだし」

「いや、でも、それは……」

「ね？　じやないと私も敬語にするんだから」

もごもごと歯切れの悪いカストルに、私は圧力を込めた笑顔で詰め寄る。せめてそうしてもらわないと困る。

「……う、わかった。わかったから！　ミラと呼ぶ。敬語も使わない！」

カストルは少しだけ焦ったような表情を浮かべたあと、私の申し出を承諾した。そして「失礼する」と言い残して、バタバタと階段のほうへと消えていく。

その後ろ姿を見送ったあと、私は部屋に戻ってスピカと食事を続けることになった。

「——ふわあ、お腹いっぱい」

「流石に食べすぎじゃない？」

「いいのいいの、だいじょーぶ。たまにしか来られないんだから、食べためとくのつ貴族令嬢らしからぬ食べっぷりを見せたスピカは、大きく伸びをする。オムライスの他にいくつか揚げ物を追加で食べた上、今はデザートにミルフィーユを食べ終えたところだ。

ここで彼女がお腹を壊したら、私はアーケツルさんに怒られてしまうのではないだろうか。

そんなことを考えながら一緒に皿の片付けをしていると、また扉がノックされる。
「はいはーい」

そろそろスピカのお迎えが来たのかもしれない。

そう思つて扉を開くと、目の前には外套のフードを被つた人がふたり並んでいた。

「ミラ！　今日は間に合つたか!?」

勢いよく口を開いたのは、私から見て左にいた人物。

「レオ、慌てすぎです」

それを右にいる長身の人物がやんわりと窘める。

一瞬驚いてしまったが、ふたりの姿もやりとりも、私にはとても馴染みがあつた。
「いらっしゃい。ふふ、今日は大丈夫。ちゃんとレオの分はとつておいてあるから。あつ、
勿論セイさんの分もありますよ。それにちょうど、新しいお菓子もあるよ」

「……本当か！ よかつた。兄上たちを振り切った甲斐があつた」

私の前にいるのは、レオとセイさんだ。私が答えると、ふたりの顔に安堵の表情が浮かぶ。

このやりとりがなんだか故郷の町で出会った頃のようで、私は思わず笑ってしまった。

確か初めてのときは、レオが『たまごのうどんが食べたい』って言つて厨房に来ただけ食べられなかつたんだよね。それに翌々年の収穫祭で私たちがやつていた焼き鳥の屋台にも来てくれたけど、あのときはお肉が売り切れだつたつけ。

私とふたりは、五年前にあの小さな町で偶然出会つた。うちの宿屋にふたりが宿泊したのがきっかけだ。

当時の私はふたりを本当の兄弟で旅人だと思つていたし、ふたりもそのように振る舞つていた。

だけど実は、レオとセイさんはこの国の第二王子とその側近の騎士だつた。

そしてさらにこのふたりも、スピカの話によれば、件の攻略対象者なのだという。

「…………ミラ、いつまで笑つてるんだ」

「ふふ、ごめ…………なんだか、いろいろと思い出しちやつて」

外套のフードを脱いだレオは、少し決まりが悪そくに口を尖らせる。珍しい銀の髪がキラキラと眩しい。

出会つた頃は同じくらいだった目線は、今では少し見上げるほどになつた。

私の変化といえば髪が伸びたくらいだけれど、レオは随分と大人びた気がする。

「レオは昔から何かと食べ損ねることが多いですからね。タイミングが悪いというかなんというか……本当に、レオらしいです」

「セイ、どういう意味だ」

セイさんもフードを脱いだ。さらりとした黒髪が露わになる。

いつもどおりにこにこと笑つていて、レオをさらつとからかう様子は、本当の兄のようだ。

その微笑みの下では、きっと私と同じことを思い出しているのだろう。

私は和やかな気持ちになりながら、レオに声をかける。

「すぐ用意するね。待つてもらつてもいいかな。あつ、でも、この部屋は今はスピカが……」